
鳥籠

藍村 泰

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鳥籠

【Nコード】

N1322K

【作者名】

藍村 泰

【あらすじ】

鳥籠から出てしまえば、もう二度とそこに戻りたくないと思った。広い空から狭い籠を見遣れば、大層窮屈そうで不自由そうに見えて。

わたしに伸ばされた手を、掴むことは出来なかった。

「君だけでも逃げて。さあ、聖堂の錠前は俺の仲間が壊してる。鳥籠から飛び立つ時が来たんだ」

「嫌だ」

反射的に答えた。恐い、恐い、恐い。外界には悪魔が蔓延っていると聖職者達に聞いたことがある。

それならば、夥しくオビタダくしい血に染まっているこの聖堂の方が幾分かましだ。

昨夜、国の中でも強大な力を持つ教団に反発し、民衆が教団へ押し寄せて来た。教団の者達は皆、女神を守るためだと武器を片手に勇猛果敢に戦ったが、結果は教団側の敗北。激戦が繰り広げられている間、わたしはこの聖堂に閉じ込められていた。わたし達が民衆に殺されないようにとの、教団側の配慮である。同じように閉じ込められていた少女達は、少年が扉を開く直前に自害した。反乱軍に犯され、屈辱的な死を迎えるくらいならばと彼女達は護身用の短剣で己の喉を突いた。

「聖なる場所を汚した貴方達には従わない」

わたしが強い口調で言えば、少年は双眸から涙を流して力なく首を横に振った。

「教団はたくさんの人々を拐い、女神の名のもとに様々な人体実験を行っていた。君もそれは知っているはずだ。調合した薬を穴という穴から注ぎ込んでみたり、目玉をくりぬき、他の物を詰め込んでみたり……」

「やめて！ やめてよ、それは貴方達の病や肉体が健やかであるように、わたし達が身を挺して」

「俺のこの皮膚や瞳を見て、それを言うのか!？」

わたしは怒りにうち震える少年の紅い目を直視出来ない。

「一年前、死に物狂いで教団を脱走するまでの間、俺は完全にモルモットだった。シスターとして大切に育てられた君にはわからないかもしれないけど、毎日悪魔とご対面さ。見るよ……実験の恐怖によつて身体中から色が抜けた。白髪赤目はどこに行っても忌まれる対象。その上、この肌」

少年はわたしの手を強引に引っ張った。体温を感じられないその皮膚は、ゴムで出来ていた。顔と首から下の肌で色合いが違つところを見る限り、首から下は全てゴムの肌なのだろう。惨い。とても、惨かった。

知らないうちに、わたしは泣いていた。

「小さなシスター。君は生き残つて、法廷で教団の本当の姿を証言してほしい。二度と、“地上の天上”という甘い言葉に騙されて教団から利用される人々が現れないように」

わたしは頷き、少年の手を強く握った。彼はほつとした表情で私を聖堂から連れ出す。涙で前が見えなかった。

教団の門を抜けた時に、ようやく自分が生まれてから今まで住んでいた“家”を振り返った。煉瓦造りの館、蔦が這う外面、奥にある真白き聖堂。そして、地下にある実験室。

「さようなら」 わたしは色んな感情を胸に抱き、その言葉を口にした。

鳥籠から出てしまえば、もう二度とそこに戻りたくないと思った。広い空から狭い籠を見遣れば、大層窮屈そうで不自由そうに見えて、その鳥籠から連れ出してくれた背中を見つめる。と、突然少年が倒れ込んだ。彼と手を繋いでいたわたしも同様に地面へ激突した。膝小僧から鮮血が滲む。

「大丈夫？」

いつまで経つても起き上がらない少年が心配になって前に回り込んだ。わたしは、思わず目を覆った。皮膚という皮膚から血が噴き

出している。

少年は苦痛に顔を歪めながらも起き上がった。

「ただの発作だ。気にしなくてもすぐに収まる」

「でも……」

少年の表情が柔らかくなる。彼はわたしの頬を優しく撫でてくれた。

「小さなシスターは優しいな。俺は、君がいてくれるだけでいい」

それ以上何も望まない、と呪文のように繰り返す。わたしは少年の頭をポンポンと撫でた。わたしが彼の側にいることを彼自身が望むならば、一緒にいようと思った。

「アラン！ アラン！」

悲鳴混じりの声上がる。声と足音がする方を見ると、大勢の人々がこちらへ駆け寄って来ていた。どうやら、少年の名前はアランというらしい。

大柄の男はわたしをアランから引き離し、自身の腕に抱き抱えた。目には涙が滲んでいる。

「だから、無理して軍に参加するなと言ったんだ」

「……父さん。でも、俺は絶対に小さなシスターを助けたかった」

アランの目がわたしを捉える。皆の目もこちらへ向く。アランは微笑んだ。

「小さなシスター……いや、メアリー。お帰り」

アランの父親の瞳孔が開く。反乱軍達に動揺が走ったのをわたしは見逃さなかった。

「何でわたしの名前を知っているの？」

疑問に答える声はなかった。アランは気を失ってしまったようでぐったりとしている。他の者達は皆、黙りこくって歩き出した。わたしは置いて行かれないように必死で、外に出たという緊張によって萎えた足を、動かした。

軍の最後尾にいた者が、教団の館——城と言えるかもしれない——に火をかけた。

これで、もうわたしは元いた場所には帰れなくなった。優しい
皇様も皆にも、もう会えない。
鳥籠が壊れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1322k/>

鳥籠

2010年12月10日19時31分発行